

方丈記

鴨 長明

ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

「たましきの都のうちに、棟（むね）を並べ、薨（いらか）を争へる、高き、卑しき、人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年（こぞ）焼けて今年つくれり。あるいは大家（おおいえ）滅びて小家（こいえ）となる。」住む人もこれに同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わずかに一人二人なり。朝（あした）に死に、夕に生まるるならひ、ただ水のあわにぞ似たりける。

方丈記は、「枕草子」「徒然草」と並んで三大随筆の一つに数えられている。

「文学名著 300 選の解説」（一ツ橋書店）より転載

たましきの：玉を敷き詰めたように美しいこと。また、その場所。

むね：屋根

いらか：瓦で葺いた屋根。また、屋根かわら。

高き：立派な。身分が高い。

卑しき：身分が低い。

まこと：事実。真実。

尋ぬる：事情を問いただす。

尽きせぬ：なくならない。